

Report



昆布干しの作業をする島の人々

見受けられる。

病院の玄関を入ると待合ロビー。数
十人の患者が午後の診療を待っている。
明るくて何やらアットホームな感じが
する。待合席の壁ぎわの一角がマット
敷きのフロアになっている。幼児を寝
かせた若い母親がくつろぎ、老婦人た
ちが足を伸ばして座り、談笑している。
都会の病院ではみられない患者サービ
スの工夫だ。珍しいアイデアはもつと
あった。

一部の椅子の背に番号がついている。
「受付開始前に病院に着いた患者に
は番号札を渡すのですが、きちんと到
着順に渡せるよう考えたものです。順
番に着席してもらおうわけです。前に少
しいざこざがあったものだから」と
院内を案内してくれた西野院長。

ロビーの奥の一角は喫煙ルーム。金
魚の水槽などで仕切って空気清浄機を
置いている。

受付は対面カウンター式。二階の

病棟はすべてのベッドがテレビ・冷蔵
庫つきである。

診察室にはカーテンの間仕切りが二
つある。着替えによる時間のロスを少
なくするためだ。

患者の検査データや注射の指示、薬
の処方せん、会計などはコンピュータ
で外来の端末に集まる。

こうしたいろいろな工夫のなかで、
待ち時間はおよそ一時間ほど。

患者の流れにはいくつかのピークが
ある。早朝からくる人、次はバスの二
便の人、空いた頃また次の便の波がど
つとくるといった傾向だという。

ただしウニ漁のある日は病院は一時
的に「開店休業」状態になる。天気が
よくて風もなく、波穏やかな日の朝に
週二〜三回、目印の旗が揚がると一斉
に漁に出る。乱獲防止のために約一時
間と制限がある。外科にはウニのトゲ
刺しや殻むきでケガをした患者も訪れ
る。ちなみにウニのトゲは奥で折れて
残るため、深い切開が必要で治療に結
構手間どる由。夏の繁忙期には病人も
増えがちだ。薬の飲み忘れによる慢性
病の悪化や、働きすぎのストレスによ
る胃潰瘍の患者も出る。

疾病傾向としては消化器疾患、感染
症のほか、脳血管や心臓、甲状腺など
の患者が多い。

がん患者の数も意外に多く、毎年二
〇〜三〇人ががんで亡くなっている。
これは同島での死亡原因の三割あまり
に当たる。

同病院の医師らは歴年の島の患者の
推移を調べ、データベースとして蓄積
して登録し、疫学的に研究。定期検診
や診療に生かしている。

胃がん(二二%)、大腸がん(二七%)
肺がん(一一%)の発生頻度が高く、
この三疾患でほぼ半分を占める。なお、
甲状腺がんの患者も多い。これらのが
んで同病院が発見の契機となったもの
が六八%に及び、検診によるものが一
〇%。

「自覚症状があつてきた患者さんの七
割くらいは進行がんで、早期のがんは
わずかに二〇%ぐらいしかありません。
しかし、受診中にみつけた患者さんは
四〇%くらいが早期がんで、これは一
般検診でみつける早期がんの比率より
も高いのです。だから私たちは「患者
さん」を治療するだけでなく、人とし
て全体的に診るという意味もあつて日
常診療で検診をかねています。常に他
の余病がないか、隠れた病気がないか
という見方で診療していくスタイルを
とっています」

これが利尻スタイルの医療の一つで
ある。

そのうえ、往診、健診、健康講演な
どを通じて働きかけも行い、地域住民
の意識レベルの向上に精を出す。

「病院へ来ない人が病気でないという
保証はないはず。そこで当院でカ
ルテのない人、五年以上病院へ来てい
ない人、検診を受けていない人などを
九五年四月から保健婦さんをお願いし
て家庭訪問してもらうことにしていま
す。これも地域医療の一つのあり方だ
と思います」

検査費用は一時的には上がるが、長
い目でみてよい結果が期待できる。

「ありがたいことに利尻町長もお金がか
かってもいいといってくれているの
で純粹に理想の医療が追求できます」

これが西野院長(内科)、小松英樹(内
科)、竹原有史(内科)、青柳幸浩(外
科)、上田拓実(外科)らの医師(現在の
み五医師)を中心に展開している同病
院の医療のまはるアウトラインである。

歴代自治医大卒の医師というメリッ
トを生かしたチームワークで利尻を地
域医療の桃源境にしたいと意気込んで
いる。

あと一〇年ほどしたら、岩手県の沢
内村、新潟県のゆきぐに大和病院に次
ぐ第三の地区として北海道利尻島国保
中央病院が話題にのぼることになるの
かもしれない。